

# 来 運 1 遺 跡

## 発掘調査報告書

2014.3

斜里町教育委員会

# 例 言

1. 本書は、北海道斜里郡斜里町字来運20番5及び20番24に所在する来運1遺跡（登録番号：I-08-61）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成25年度文化財補助事業（国宝重要文化財等保存整備費補助金）に係る町内遺跡学術発掘調査（保存目的のための内容確認調査）である。
3. 調査期間、面積ならびに調査体制は以下の通りである。  
発掘調査期間 平成25年9月18日～平成25年10月3日（現場作業）  
平成25年11月26日～平成26年3月28日（整理作業）  
調査面積 28㎡  
調査体制  
調査主体者 斜里町教育委員会 教育長 村田 良介  
担 当 者 斜里町立知床博物館 学芸主幹 松田 功  
調 査 員 斜里町立知床博物館 学 芸 員 平河内 毅  
” 臨時職員 高橋 鵬成・大西 凜（慶応義塾大学大学院生）  
発掘現場作業員  
牧野睦美、元木哲之。  
整理作業員  
近藤富士子、佐藤美由樹、丹治八千代、西塚玲子、野口京子、牧野睦美、元木哲之。
4. 本書の執筆は松田と平河内が分担した。最終の執筆責任は松田にある。現場作業における図面作成並びに、整理作業における第2図版作成は、平河内が作業にあたった。図版作りのための遺物の実測、拓本並びにトレースは整理作業員の各々が担当した。現場での写真撮影は、調査員が中心となり作業にあたり、報告書用の遺物写真撮影に関しては松田と整理作業員の元木、牧野があたった。
5. 発掘調査区、層位図、遺構平面及び断面図、遺物平面・垂直分布図にはそれぞれスケールを入れ縮尺比を示した。また、土器拓本および石器実測図は等倍率とした。
6. 遺跡位置図には、国土地理院発行の1/25,000地形図、斜里（NK-55-31-5-1・2）の一部を使用した。また、遺構などの平面図中に付している方位は全て磁北である。
7. 出土遺物の保管・管理は、斜里町教育委員会（斜里町埋蔵文化財センター）で行う。
8. 文章等に記載している略号は以下の石質を示している。OB：黒曜石、AND：安山岩。
9. 発掘調査及び本書作成にあたり、以下の方々、機関のご協力、ご指導、ご助言を賜りました。  
ここに氏名を記し、感謝申し上げます（順不同、敬称略）。  
水ノ江和同（文化庁文化財部記念物課）、藤原秀樹（北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課）、佐藤孝雄（慶応義塾大学）、高嶋 優（奈良教育大学学生）、森本 拓（立正大学学生）。

# 目 次

例 言 .....	I
第1章 調査の概要 .....	1
第2章 各調査区内の遺構及び遺構外出土の遺物 .....	5
まとめにかえて .....	9
報告書抄録 .....	10

# 図 版 目 次

第1図 来運1遺跡位置図 .....	2
第2図 地形図及び発掘調査区 .....	3
第3図 層位図(1) .....	4
第4図 層位図(2) .....	4
第5図 層位図(3) .....	4
第6図 遺構配置図および遺物平面分布図 .....	4
第7図 トレンチ1 遺構外(表土・Ⅷ層)出土土器・石器 .....	5
第8図 P I T 1 (土坑) .....	7
第9図 黄褐色ローム質土範囲 .....	7
第10図 トレンチ3 遺構外(表土・Ⅸ・Ⅹ層)出土土器・石器 .....	8

# 写真図版目次

## PL.1

### 遺跡近景

トレンチ1・2 掘削前状況

トレンチ1 完掘状況

トレンチ2 完掘状況

トレンチ3 作業風景

トレンチ3 P I T 1 (土坑) 掘削状況

トレンチ3 セクション

作業風景

## PL.2

トレンチ1 遺構外(表土・Ⅷ層)出土土器・石器

トレンチ3 遺構外(表土・Ⅸ層・Ⅹ層)出土土器・石器

# 第1章 調査の概要

## 発掘調査の経緯

2004年度の国営畑総事業に伴う緊急発掘調査で、縄文中期末の平地建物跡の炭化材の一部が良好な状態で確認された。この貴重な考古学的発見に伴い、翌年、国庫補助を受け、保存を目的とした建物跡全域を掘削する学術調査を実施し、縄文期初の焼けた伏屋式平地建物跡遺構の発見へとつながった。この来運1遺跡での発見を契機に、縄文期の平地住居跡や盛土遺構の調査が注目を集めるようになった。当遺跡ではこの調査以降、追加の調査は実施していなかったが、2012年に町指定文化財（史跡）になったのを機に町民や地域からの関心が高まった。関心の中心は、平地住居跡集落の有無やその広がりや堅穴住居跡集落との関連性であり、早期の検証を行い調査結果によっては、より高位の指定文化財を目指す必要があるとの声から今年度学術調査を実施することとなった。

## 立地

当遺跡は北緯43°50'25"、東経144°38'46"、斜里市街地の南方向約10km、標高約38～47mの斜里岳北側山麓の猿間川左岸段丘面上に存在している（第1図）。遺跡が立地する丘陵地は、摩周岳起源とされる斜里層及び屈斜路火砕流などからなる第四紀沖積世・洪積世火山噴出物を主とした堆積層から構成されている。この丘陵地の東側には斜里川水系の猿間川が流れ、その支流には孵化場川や水無沢川といった湧水を源とする小河川が複数流れている。これらの支流沿いには小規模な河岸段丘が形成され、その段丘面上に数多くの遺跡が分布している。当遺跡周辺に見られる遺跡の多くは縄文期的のもので、その中でも最も多く確認されているのは縄文中期である。古くは、石刃鏃を伴出する丘陵地上の川上7・8遺跡（I-08-196・197）のほか、縄文早期東釧路Ⅲ式土器を伴出する来運5遺跡（I-08-155）がある。

## 発掘調査区設定

調査区は、当遺跡を町指定史跡とする際に設定された、町有地の範囲境界杭を基準座標点として設定した（第2図）。当初、調査区は基本1m×10mのトレンチを一区画とし、3トレンチを調査するよう設置した。しかしながら、どのトレンチもカクランの頻度が高く一様の面積に区分するには至らなかった。区画番号は東西方向をアルファベット順（a・b・A）、南北方向をアラビア数字順（1～6）とした。

## 層位

以前の調査では第I～XⅢ層までを確認したが、今回の調査では耕作やカクラン層が多く、自然堆積している層準はⅥ層からⅩⅣ層までを確認した（第3～5図）。遺物包含層は2層、テフラは3層確認できた。

I層 耕作土。30～40cm。

Ⅵ層 黄褐色軽石（Ma-b5：摩周岳b5軽石、約1,000年前降灰）。層厚5～10cm。

Ⅶ層 黒色土～暗褐色土層。調査区北側ではa層（黒色土）とb層（褐色土）とに分層可能であった。層厚5～25cm。

Ⅷ層 黒褐色土層。縄文中期の遺物を含む。層厚10～20cm。

Ⅸ層 暗褐色土層。暗黄褐色土や軽石なども含む。層厚10～25cm。

X層 黄褐色砂質ローム層。層厚20～50cm。

XⅠ層 青灰色火山灰（Ma-f：摩周岳f火山灰、約7,000年前降灰。小清水丘陵地で同様の火山灰を確認しているが、風成作用による2次堆積層の可能性もある。）層厚10～15cm。

XⅡ層 暗褐色土に暗黄褐色土が混在する層。縄文早期の遺物を含む。層厚10～20cm。

XⅢ層 黄褐色ローム質土層。層厚30cm以上。層中に風成堆積による火山灰、砂、レキ、軽石などが見られる。

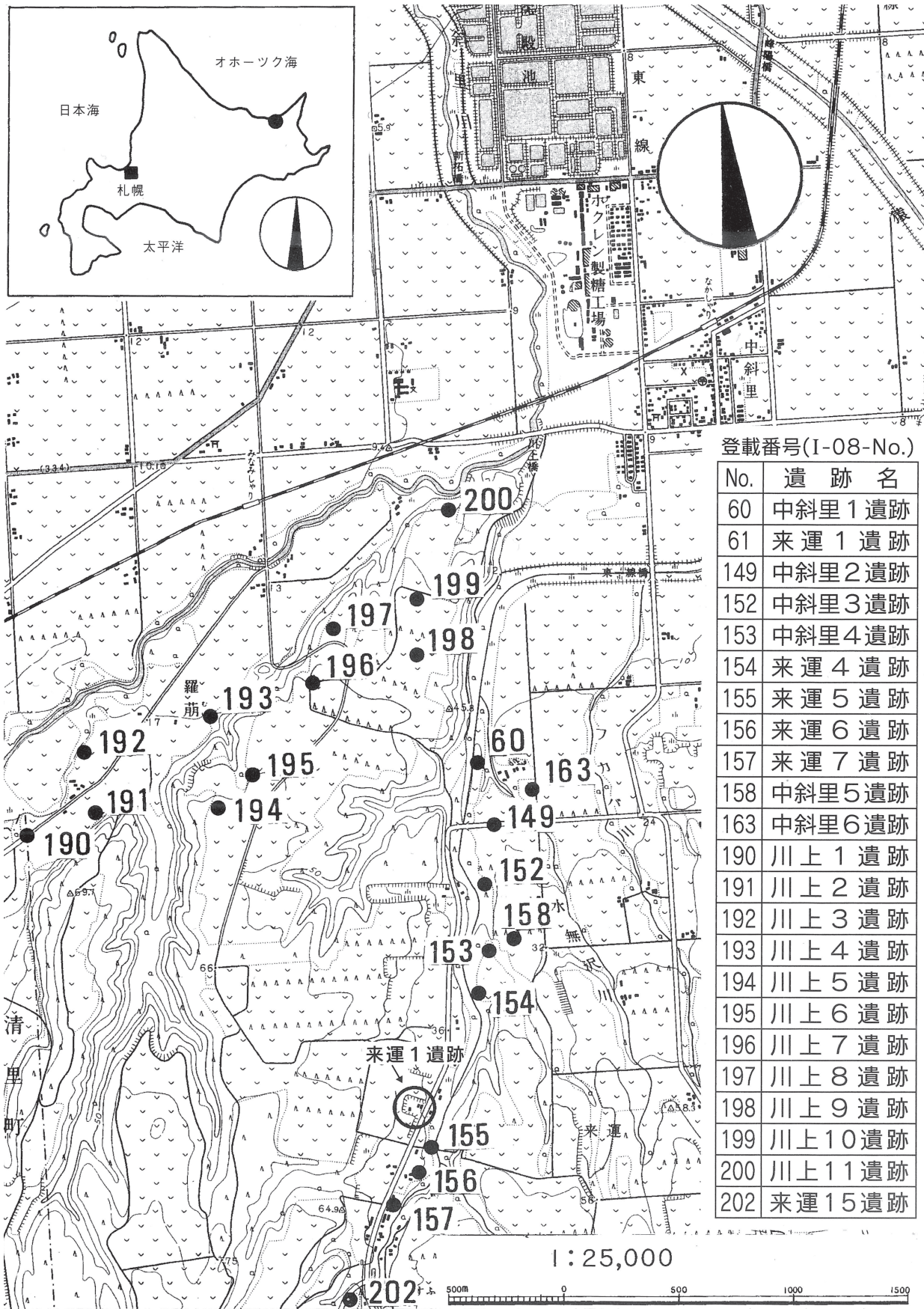
XⅣ層 暗黄褐色～暗赤褐色軽石層（江南軽石層：約12,000年前降下）。

## 遺構の概略

調査の結果、トレンチ3より土坑が1基と2005年に調査した際、平地建物跡を被っていた黄褐色土と同様の土の広がりが検出された（第6図）。

## 遺物の概略

出土遺物の内訳および点数は、土器3点、石器4点、レキ1点、炭化物9点の合計17点であった。土器は、縄文早期の無文土器（テンネル式か）と東釧路Ⅲ式ないしⅣ式土器、縄文中期末の北筒Ⅲ式土器が出土している。石器は刃部調整のある剥片や、レキ石器のすり石などであった（第6図）。

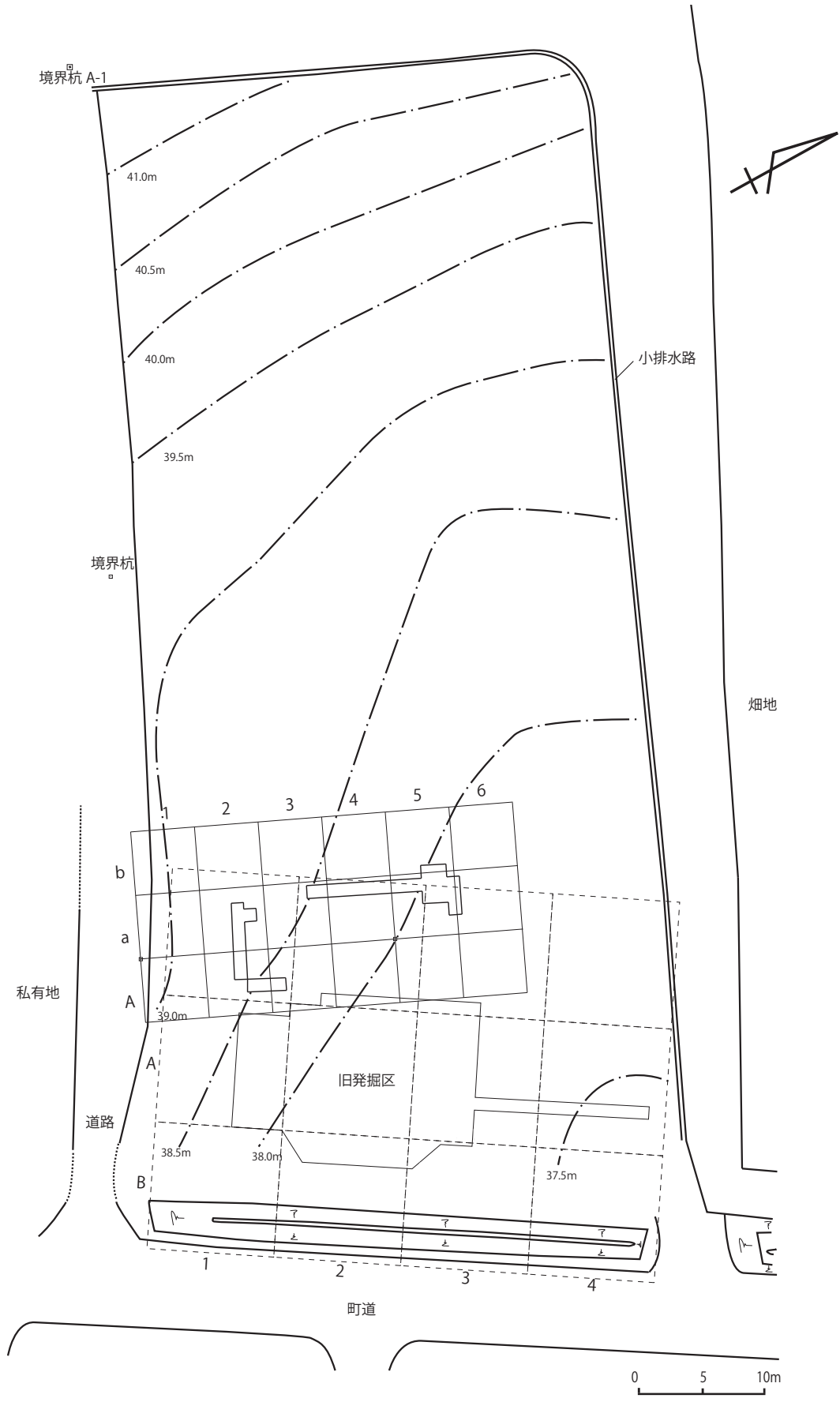


登載番号(I-08-No.)

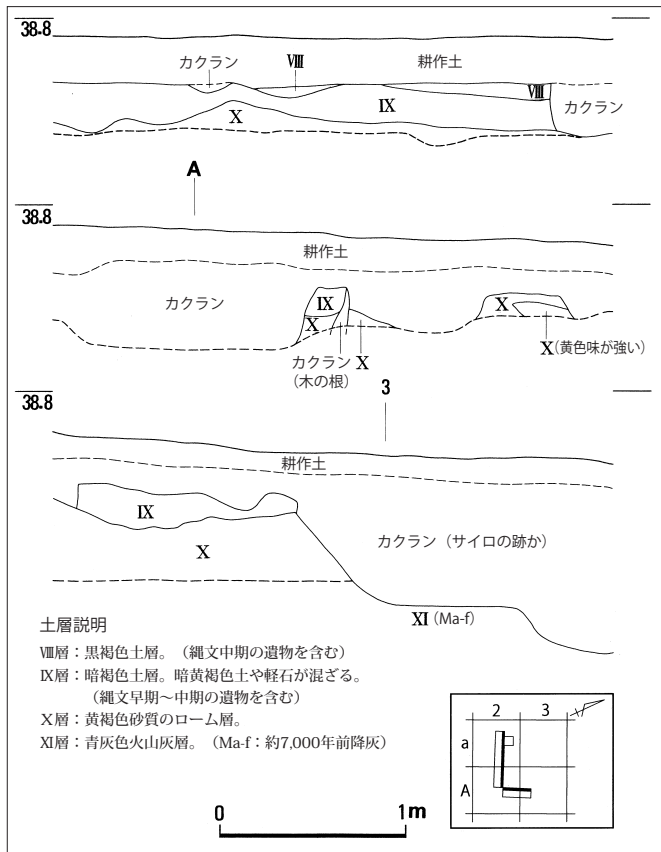
No.	遺跡名
60	中斜里1遺跡
61	来運1遺跡
149	中斜里2遺跡
152	中斜里3遺跡
153	中斜里4遺跡
154	来運4遺跡
155	来運5遺跡
156	来運6遺跡
157	来運7遺跡
158	中斜里5遺跡
163	中斜里6遺跡
190	川上1遺跡
191	川上2遺跡
192	川上3遺跡
193	川上4遺跡
194	川上5遺跡
195	川上6遺跡
196	川上7遺跡
197	川上8遺跡
198	川上9遺跡
199	川上10遺跡
200	川上11遺跡
202	来運15遺跡

第1図 来運1遺跡位置図

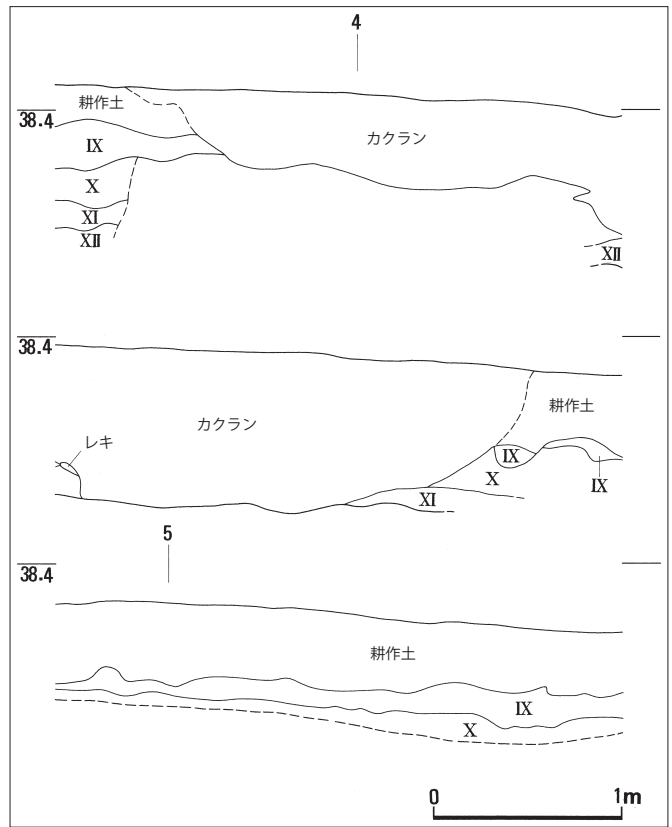
A-2



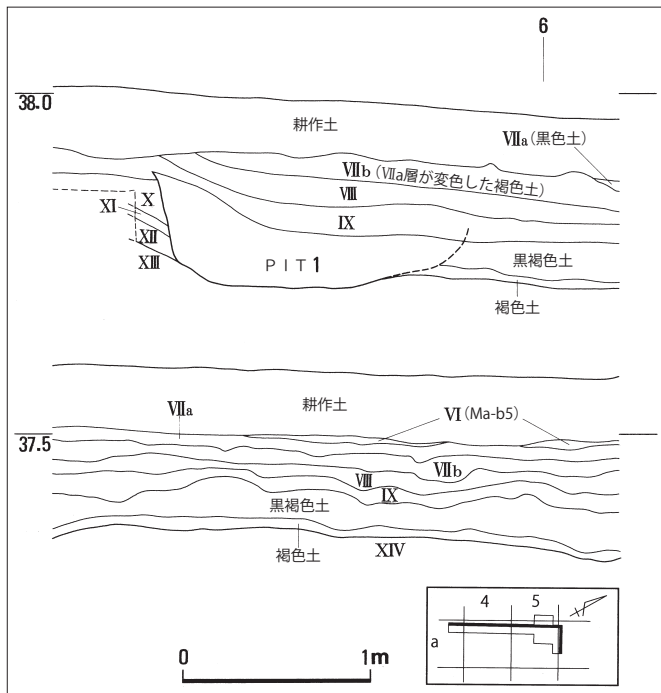
第2図 地形図及び発掘調査区



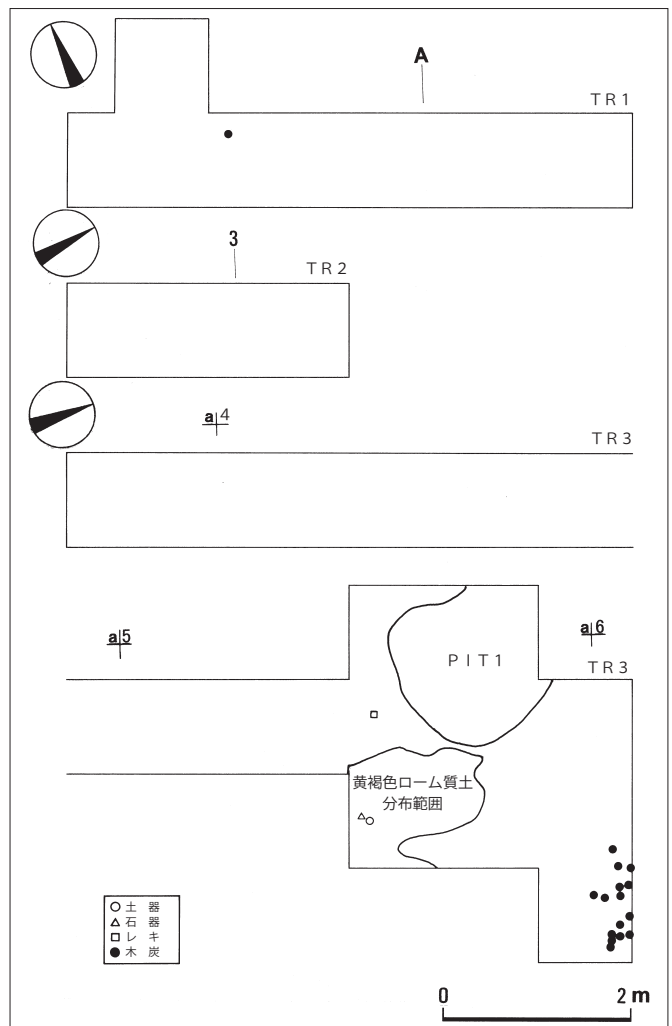
第3図 層位図(1)



第4図 層位図(2)



第5図 層位図(3)



第6図 遺構配置図および遺物平面分布図

## 第2章 各調査区内の遺構及び遺構外出土遺物

### トレンチ1

#### 発掘調査区設定

平成17年度の調査で検出された平地建物跡の西側においてa2、A2グリッドを中心に1m×6mのトレンチを設定して調査を実施した。

#### 層位

本トレンチは、耕作と車庫の跡により一部が攪乱を受けており、基本層位の堆積状況が確認できたのは主に西側であった(第3図)。

**VIII層** しまりの弱い黒褐色土層。耕作により大部分が削られ、厚いところでも8cmほどの堆積である。縄文時代早期の遺物が出土しているが、過去の調査では縄文中期の包含層であり、下層からの混入と推察する。

**IX層** しまりのやや強い暗褐色土層。層厚は8~26cm。暗黄褐色土や軽石が部分的に混じる。

**X層** しまりの強い黄褐色砂質ローム層。一部では、黄色味の強い部分の確認されている。

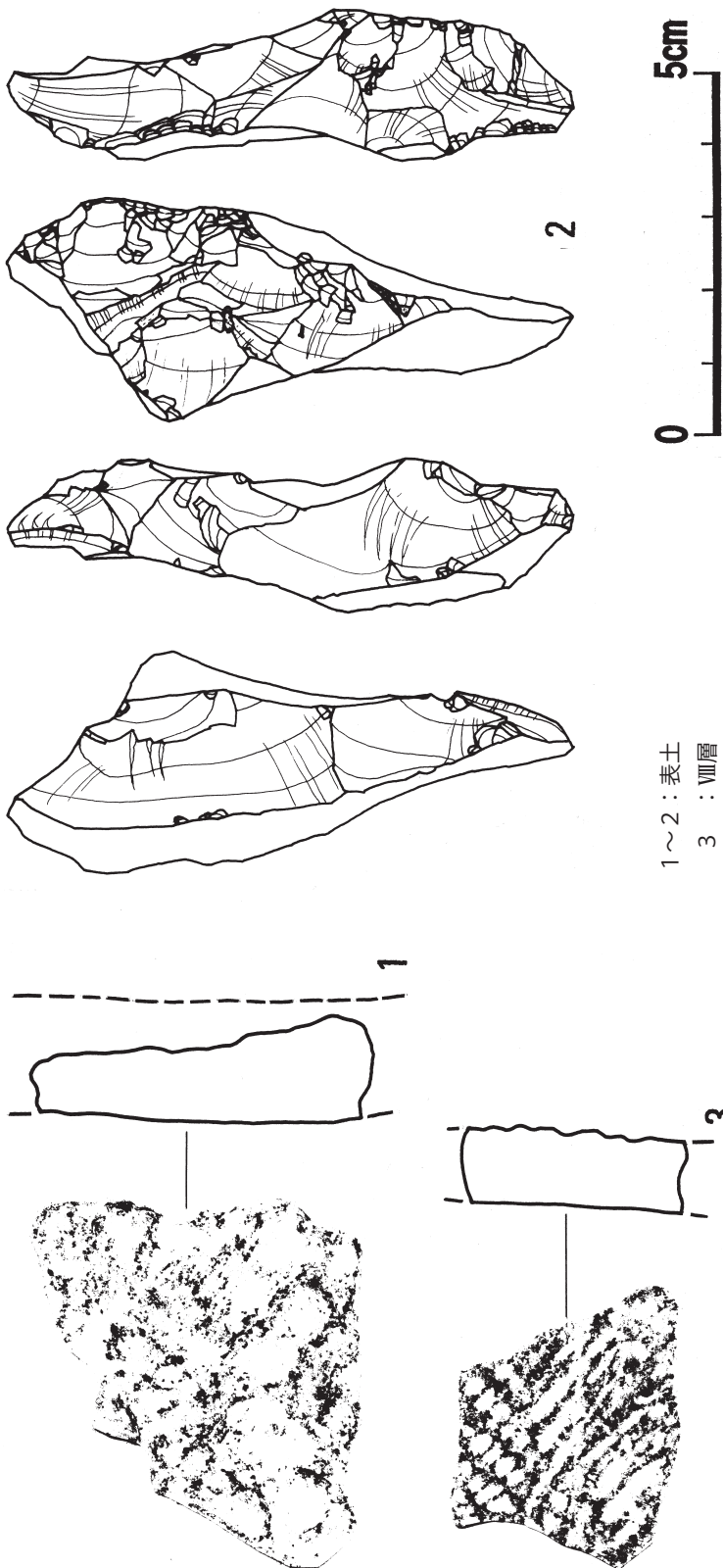
#### 遺構外出土遺物

##### 遺物(第7図)

遺物は土器2点、石器1点、計3点出土している。このうち土器1点と石器1点は表土からの出土である。基本層からはVIII層出土の土器片1点のみである。

**土器** 第7図1は、耕作土から出土した縄文中期土器の胴部破片である。土器表面が剥離し、文様が失せている。胎土より縄文中期と判断した。3は、VIII層出土の縄文早期土器の胴部破片である。胎土に砂レキを多く含んでいる。LRとrが施文され、それを羽状縄文としている。東釧路Ⅲ式土器と考えられる。

**石器** 第7図2は、表土より出土した残核剥片である。OB(黒曜石)製である。



第7図 トレンチ1 遺構外(表土・VIII層)出土土器・石器



## 小 括

本トレンチより遺構は検出されなかった。トレンチ東部が攪乱を受けていたこともあり、遺物の出土点数は3点とごく少量であった。

# トレンチ2

## 発掘調査区設定

A2、A3グリッドを中心として1m×3mのトレンチを設定して調査を実施した。本トレンチは、3つのトレンチの中で最も平地建物跡に近く、近接する遺構の有無を確認することを目的とした。

## 層 位

IX層 しまりのやや強い暗褐色土層。層厚は4～21cm。暗黄褐色土や軽石が部分的に混じる。

X層 しまりの強い黄褐色砂質ローム層。

XI層 青灰色火山灰層。Ma-f：約7,000年前降灰。

## 遺構外出土遺物

本トレンチより遺物は出土していない。

## 小 括

耕作と攪乱により北東部の基本層はほぼ残存しておらず、遺物及び遺構は確認されなかった。そのため、それ以上拡張は行わず、調査を終了した。

# トレンチ3

## 発掘調査区設定

トレンチ1の北側付近から北西方向へ1m×10mのトレンチを設定して調査を実施した。その後、遺構の検出に伴い計8㎡拡張区を設定し、調査を継続した。

## 層 位

本トレンチは、南側の多くが耕作と立木根痕により攪乱を受けているものの、北側は基本層位の残存状態が良く土層の確認ができた（第4・5図）。また、北側と南側とでは土壌の堆積環境が異なっており、北側では基本層位の分層化がなされた。

VI層 黄褐色軽石（Ma-b5：摩周岳b5軽石、約1,000年前降下）。

VII層 a層とb層に分層された。a層は黒色土、b層は暗褐色土からなる。トレンチの北側で顕著である。

VIII層 黒褐色土層。縄文中期の遺物を含む。層厚10～20cm。

IX層 暗褐色土層。層厚4～21cm。暗黄褐色土や軽石が部分的に混じる。

X層 黄褐色砂質ローム層。層厚20～50cm。

XI層 青灰色火山灰（Ma-f：摩周岳f火山灰、約7,000年前降灰）層厚10～15cm。

XII層 暗褐色土に暗黄褐色土が混在する層。縄文早期の遺物を含む。層厚10～20cm。

XIII層 黄褐色ローム質土層。層厚30cm以上。

XIV層 暗黄褐色～暗赤褐色軽石層（江南軽石層：約12,000年前降下）。

## 遺 構

トレンチ1内では、土坑1基のほか黄褐色ローム質土の広がりが見出された（第8・9図）。土坑内からは遺物が出土していないため構築時期は不確かである。黄褐色ローム質土の広がり後述の通り、平地住居跡を示す盛土とも考えられるが、時間がなく遺構の存在を確定するには至らなかった。以下、検出された遺構について述べる。

## PIT1（土坑）

トレンチ3の北部で縄文前期の遺物を包含するIX層を掘削中、黒色土の広がり確認されたため、土坑と認定した。検出当初は土坑の東側部分のみが確認され、全体のプランを確認するために西側へ拡張区を設定し、掘削

を継続した。しかし、土坑の範囲は拡張区内で完結せず、さらに北側へと広がるため、堆積状況を確認しながら東側部分のみを掘削することとした。

### 遺構（第8図）

形態 平面形—不定形と推測する。掘削部分の最大径1.8m。深さ0.5m。

層位 覆土は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、茶褐色土、褐色土、軽石で形成されている。南側の壁は底面から直上気味に立ち上がる。IX層掘削中に確認されたことから、IX層中の構築であると考えられる。

小括 遺物の出土はなく、構築時期は不明である。また範囲未確定であり、西側及び北側は未調査のため、今後の調査により時期が判明する可能性がある。

### 黄褐色ローム質土範囲

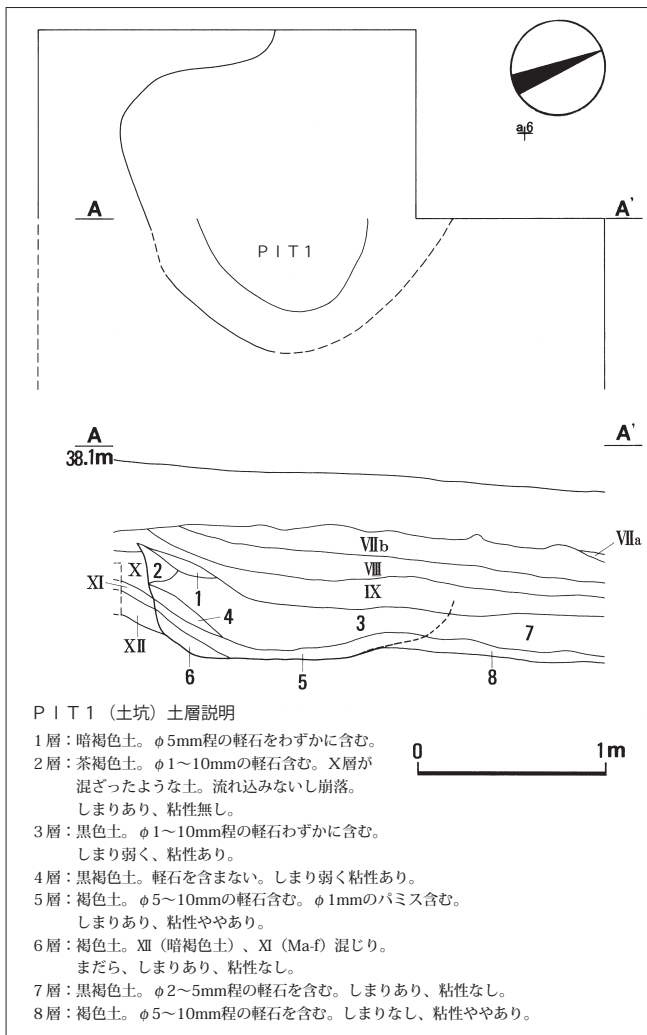
トレンチ3の北東部において、VIII層掘削中に黄褐色土の堆積が確認されたため、北東へ2m<sup>2</sup>拡張区を設定し、広がりを確認した。また、層位的な位置づけを確認するために、トレンチ3の北側東壁部分においてサブトレンチを設定し記録を行った。

### 黄褐色ローム質土分布範囲（第9図）

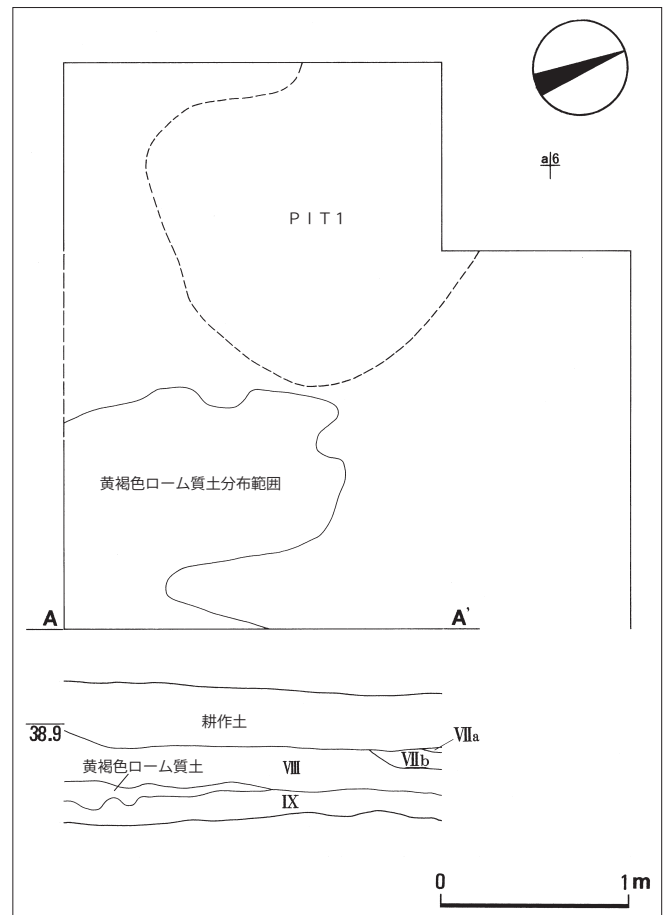
分布 黄褐色土は、PIT1の東側に分布が確認された。検出された黄褐色土は全体の一部であり、現段階での分布を見る限りでは南方向へとさらに広がることが予想される。

層位 層位的には、VIII層とIX層の間に位置している。層厚は厚い所で16cm、薄い所では4cm程である。

小括 黄褐色土は、粘り気がなく、軽石などが風化したローム質土壌であると考えられる。平地建物跡に伴う盛土である可能性が考えられるが、残念なことに時間的制約のため分布範囲の確定と、黄褐色土の下に炭化材



第8図 PIT 1（土坑）



第9図 黄褐色ローム質土範囲

が残存しているかを確認するに至らなかった。この黄褐色土の分布範囲の確定と、平地建物跡に伴う盛土であるかを確認することは今後の調査課題の1つである。

### 遺構外出土遺物

#### 遺物 (第10図)

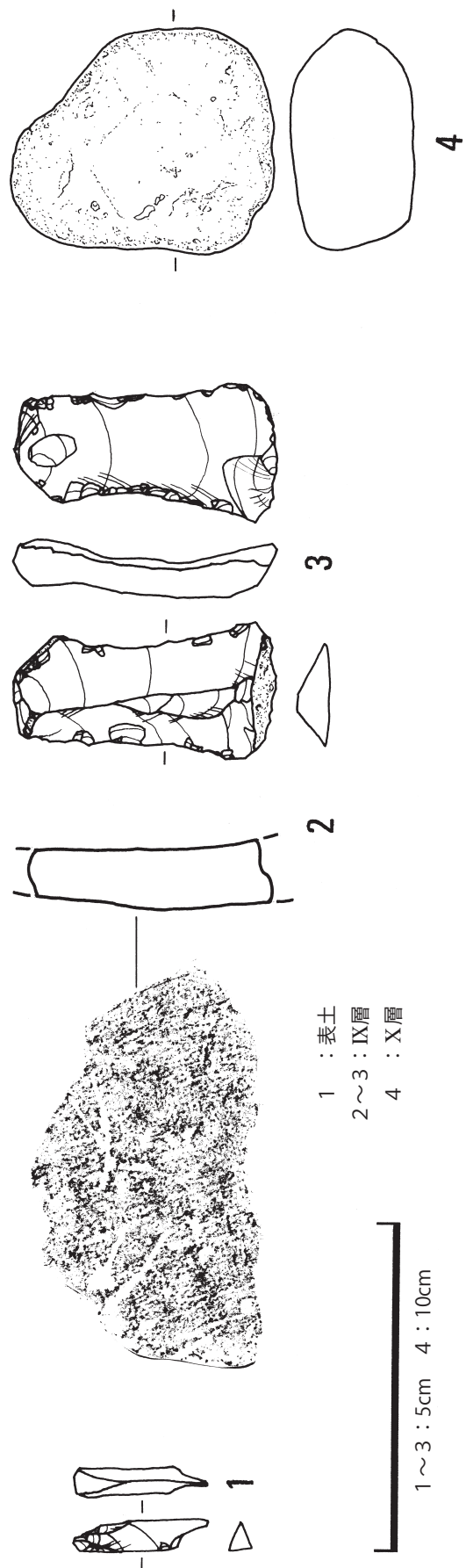
遺物は土器が1点、石器3点、木炭15点、計19点であった。

**土器** 第10図2は、耕作土(表土)出土の縄文早期土器の胴部破片である。文様は無文である。テンネル式土器相当であろうか。胎土は繊維を多く含んでおり、縄文前期土器の可能性も考えられる。

**石器** 第10図1は、表土出土のOB製細片である。3は、IX層出土のOB製リタッチの見られる石器である。4は、X層より出土したAND製すり石である。その他に、炭化物が出土している。

#### 小括

本トレンチでは、土坑1基と黄褐色ローム質土範囲が確認された。いずれも時期と範囲は未確定であるため、今後の調査課題である。またトレンチの東部では、VII層中から木炭が集中して出土しているが周辺から焼土等は確認されなかった。(平河内 毅)



第10図 トレンチ3 遺構外(表土・IX層・X層)出土土器・石器

## まとめにかえて

2004・2005年度に実施された来運1遺跡の発掘調査により、日本で初めて縄文文化期の焼けた伏せ屋式平地建物跡の検出例として発表されてから、9年の歳月を要した2013年に再度発掘調査を実施した。再調査の契機となったのは、平地建物跡が見つかった土地周辺を町有地として取得し、さらにその取得地を2012年に町指定文化財（史跡）にしたことから考古学や文化財に興味のある町民や地域から再度遺跡の関心が高まったことにある。特に関心が持たれたのは、現地に同程度の平地建物跡がまだ残されているのか、平地建物跡だけの集落があるのか、またその広がりほどの程度なのか、同時期の竪穴住居跡の集落と棲み分けはあるのかであった。これらの関心が高まる中、早期の検証を行い調査結果如何によっては、より高位の指定文化財登録の可能性も予想されるではないかとのことから今年度学術調査を実施することとなった。

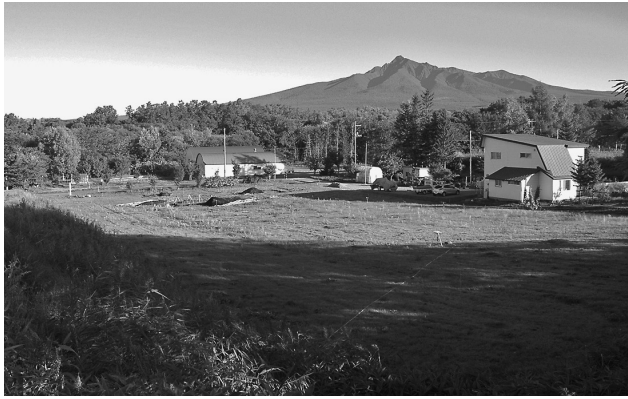
調査の結果、前回、平地建物跡の範囲を明示した黄褐色土（屋根の盛土）と同様の土層の広がりを確認した。しかしながら、発見したのが調査終了の前日であったため時間が足りなく、その広がりがどの程度あり、その下層に炭化材を包含するのかなど、最も重要な事項を確認するには至らなかった。発見場所は前回調査した平地建物跡の北西方向約10mの位置にあり、東側に向かって広がるように見受けられた。

今後調査をする際は、第一に、この広がりの範囲を確かめること、第二に、下層に建物として利用した炭化材の存在を確かめること、そして、当遺跡内で二つ目の発見となる平地建物跡であるかを確かめることである。また、来運1遺跡の範囲も正確に調査されたものではないため、それを確かめる範囲確認調査等も実施する必要がある。

出土遺物並びに遺跡を構築する時期については、土器と石器合わせても10点にも満たないため多くのことは言及できないが、2004・2005年度の調査結果からも窺えるように、明らかに縄文早期から中期にかけての文化層が存在することは確かであろう。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	らいうん1いせき							
書名	来運1遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	斜里町文化財調査報告							
シリーズ番号	XX XVIII							
編著者名	松田 功・平河内 毅・高橋鵬成・大西 凜							
編集機関	斜里町教育委員会							
所在地	〒099-4113 北海道斜里郡斜里町本町12番地 TEL 0152-23-3131							
発行年月日	平成26（西暦2014）年3月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
来運1遺跡	斜里郡 斜里町字 来運 20番地5、 20番地24	01545	61	43 50 25	144 38 46	2013. 9.18～ 10.3	28m <sup>2</sup>	遺跡の内容を 確認するた めの学術発 掘調査（保 存目的のた めの内容確 認調査）
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
来運1遺跡	遺物包含地	縄文早期 縄文中期		土坑1基		縄文早期・ 中期土器 石器		縄文中期の焼けた土 葺の伏屋式平地建物 跡が発見された時と 同様の黄褐色ローム 質土が検出された。 遺構は土坑が1基の み。



遺跡近景



トレンチ1・2 掘削前状況



トレンチ1 完掘状況



トレンチ2 完掘状況



トレンチ3 作業風景



トレンチ3 PIT1(土坑)掘削状況



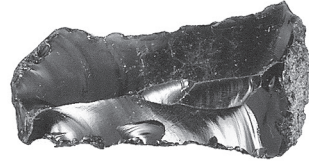
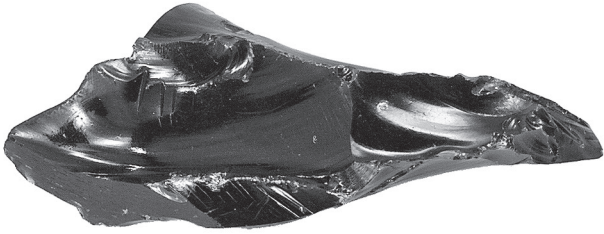
トレンチ3 セクション



作業風景



トレンチ1 遺構外（表土・Ⅷ層）出土土器・石器



トレンチ3 遺構外（表土・Ⅸ層・Ⅹ層）出土土器・石器





**斜里町文化財調査報告 XXXVIII**  
**来運 1 遺跡 発掘調査報告書**

発行日：2014年 3 月

発行者：斜里町教育委員会  
北海道斜里郡斜里町本町12番地

印刷：有限会社 斜里印刷  
北海道斜里郡斜里町本町11番地2